
線香花火をひとりで燃やす

木月 愛美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

線香花火をひとりで燃やす

【Nコード】

N2510B

【作者名】

木月 愛美

【あらすじ】

ひとりで燃やす線香花火はとびきり寂しい。その線香花火に何を
見ますか…。

線香花火は綺麗だ。そしてそれ故に儚い。世の中の全てのものがそうであるように。長い間、綺麗で在り続けるものなどないのだ。ひとりで燃やす線香花火は、とびきり寂しい。綺麗だからこそ寂しい。

落ちませんように。できるだけ長い間はじけていますように。

菅原のことが好きって訳じゃない。愛してるって訳じゃない。真っ白い病室で真っ白い光を真っ白い頬にうけた彼女は、綺麗すぎて儚いなすぎた。薄汚れた僕とは全く違う世界に菅原はいた。

菅原は大学時代の友達で、菅原と僕を含む男女四人でいつもつるんでいた。四人でいろいろなところに行った。いろいろなことがあった。誰が好きだとか嫌いだとか。

そんなたぐさんの思い出の中で今真っ先に思い出すのは、地元の公園で自分たちだけで勝手に開催した小さな花火大会だ。そこで線香花火を嬉しそうに見つめる、菅原の姿だった。あの時の彼女は病氣になんかに侵されてなくて、健康そのものの頬が、赤い線香花火に照らされて赤く光っていた。

さっき、僕は何本かの線香花火を持って菅原の病室に飛び込んだけれど、彼女にそれを渡すことは出来なかった。どうしようもなく情けない気持ちで、下らないことばかりを話して帰ってきた。例えば気休めであっても、渡せれば楽になったかもしれないのに。例えば目茶苦茶であっても、渡せれば彼女の頬に赤い光が灯るかもしれないのに。

けど今、冷静になって考えてみると、菅原に花火を渡しに行こうだなんて馬鹿で阿保な選択だと思う。渡さないで良かった。彼女は病気を患って入院中だし、病院は火気厳禁だし。それにこんなに線香花火にこだわっているのは僕だけだ。

大学時代。いつもの四人組。勝手に開いた小さな花火大会。そん

な思い出のあるこの公園で、僕は今たったひとりだった。ひとりで線香花火をふかしている。

綺麗だな。線香花火は赤くはじけている。

落ちませんように。できるだけ長い間はじけていますように。

近いうち落つこちて地面の土に掻き消されてしまうであろう線香花火に、僕は祈った。今ここにひとりであるからこそ余計に、この赤い光を失いたくなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2510b/>

線香花火をひとりで燃やす

2010年11月23日05時28分発行